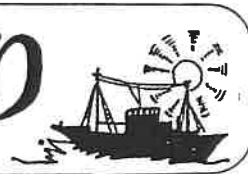


福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会 〒136 東京都江東区 夢の島3-2 都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494

一九四五年八月六日、午前八時すぎ、私は広島市江波町の三菱造船所の木造バラックの中にいてあの閃光を見た。旧制中学四年生、「動員学徒」として軍用輸送船づくりの重労働を強いられ

あわせの水漏れ防止の詰めものをして、せつせと内装をほどこしていたところを見ると、三菱はこんな出来損ないの大欠陥船までも国に売りつけようとしたぶん進水時の内金をむしり取っていたのだ。

地獄のなかに陥れた。半数はその地獄のなかで、あるいは地獄に追われて死んだ。残りの半数は、いまなおその同じ地獄に追い立てられている、そしてやがて地獄を背負ったまま死んでゆく。被爆者は生きていくかぎり原爆から逃れることはできず、「被爆者」でないものになることはできない。これが被爆者を原爆とのたたかいに駆りたてる、それ以外に被爆者の生きる道はないから。

もう一度考えてみたいこと三題①

「われわれはみんなヒバクシャ」を考える

小西 悟

(日本被団協国際委員長)

夏は高校生の学習の場、アメリカの高校生も見学

久保山愛吉記念碑を囲む夾竹桃が、白・桃・赤とかつと咲く夏。展示館は夏休みの中学生・高校生の学習の場ともなります。川口東高校、津田沼高校、都立大付属高校、いくつかの高校が展示館見学のレポートを夏の課題にし、毎日五・六人のグループが次々に訪れ、メモを取り写真を撮り、本を読み、テابلルを囲んで語り合います。遠く岡山県の高梁高校生も訪れました。



船を背にして(7月24日)

島田 轍之助 さんが 七月二 十七日 亡くな った。 九一歳。

船を守った島田さん逝く

十二歳のときから六〇年近く、深川木場でいかだ師を勤めた生粋の江戸っ子職人。引退後の一九七一年、夢の島に沈没寸前の福竜丸を「だまっはおれん」と塗装業の息子と彦さんと手弁当でペンキ塗りの大掃除をかってでた。「水爆をくらったときと同じ白い色」に船はよみがえった。

その後三年近く、毎日深川の自宅から自転車をもつて夢の島へ。船底に溜まる水を掻き出し、船を守った。「早くこんと船が沈んじやうぞ」。島田のおじいさんの電話に「ごみの島に駆け付けた当時の青年は数多い。展示館ができた後も、愛児を慈しむように船を見守り続けた。」

「ないで」を胸に熱心に通訳、久保山愛吉記念碑前では涙声でその言葉を読みながら説明しました。ヴァージニアからきたジェファニー・ネビンさんは、「未来の子どもたちに原水爆のない地球を残したい」とノートに書き記しました。

青年団協議会の研修会も 七月十九日、梅雨明けの休日での満員の展示館に、日本青年団協議会の青年約五十名が訪れました。東京で開催された同会の「みんなやる気だぜミナール」に参加した各地の青年団役員のみならず、最終日に企画されたオプショナルプログラム「原水爆禁止運動の原点にふれよう」第一



夏休み一子どもたちは「とびうおのぼうや…」が大好き。

西宮市で英伸三氏の写真展 各地で原爆展が開かれ第五福竜丸のパネルも航海に出ましたが、西宮市では七月十八日から一週間、市主催の「原爆展」が開かれ、たくさんの写真パネルや大漁旗、模型の船が展示されました。今年には英伸三氏の「船を見つめる子どもたち」の特別写真展も行なわれ、市民の反響をよびました。

車椅子に乗ってではあったが、家族と共に何年かぶりに来館され、船を仰ぐように一周したあと、ふところから千円札を何枚か取出し私たちに押しつけ「注射にいく」と帰られたのは、亡くなる三日前のお屋敷であった。その手のぬくもりがいまも残る。第五福竜丸にお別れにこられたのであろう。

本土復帰二十年の沖縄②

首里城の正殿も復元へ

岩垂 弘

沖縄の本土復帰二十年を機に、沖縄の一部の人々の間で、自らの歴史と文化を見直そうという動きが芽生えている。言うなれば、「沖縄県人の、そして沖縄文化のアイデンティティーとは一体何だろうか」との自分自身への問いかけが始まったのだ。

大田昌秀・沖縄県知事（琉球大名誉教授）が『アサヒグラフ』（九二年一月十七日号）で「琉球処分以来、沖縄文化は否定され、時には弾圧されてきた。戦後は生活の窮状に追われ、復帰後は本土に追いつこうとするのに必死で、自分たちの祖先がつかって来た豊かな文化を顧るひまもなかった。復帰後の第一次沖縄振興開発計画では、本土との格差是正を、その後の十年間の第二次振興開発計画では、基地への依存からの脱却を目指す、基地への目標も徐々に達成しつつあるいま、そして今後は、沖縄人のアイデンティティーの確

立が求められているのである」と述べているのも、その間の雰囲気や伝えたものと見て良いだろう。自らの歴史と文化の見直し。それを象徴的に示しているのが、首里城正殿の復元だ。なぜなら、首里城こそ沖縄の歴史・文化を象徴する建造物だからである。正殿の復元は本土復帰二十年の記念事業の一つとして、文化庁の手で進められているが、その復元は沖縄の人々が長い間望んでいたものだ。首里は、今では那覇市内の小高い丘一帯を指す地名だが、かつてここに琉球王朝の都があった。

王家の宮殿であった首里城がいつ創建されたか不明だが、過去に四回ほど全焼し、再建されたといわれている。最新のものは一七〇九年に全焼した後、一七五一年に再建されたといわれている。が、これも一九四五年の沖縄戦で米軍の猛攻撃を浴び、全焼した。日本軍が首里城の地下に守備軍司令部をつ

くっていたため、米軍の砲火はここのほか激しかった。ここには、国宝級の文化財が二十以上もあったが、これも灰燼と化した。その首里城の正殿の復元が今年十一月に完成する。工事費百五十億円。木造三層建てで幅二十八・七m、高さ十五・六m、奥行き二十一・三m。建物は朱塗りと高台に立つ壮大な正殿が沖縄の紺碧の空をバックにそびえることになるだろう。それは、沖縄を多少知っている本土の者にも心躍る光景だ。沖縄の人々の喜びが分かるというものである。

本土の文化とは異なる沖縄の文化を再認識しようという動きは、他にもある。その一つが、琉舞の新たなブームだろう。琉舞とは、宮廷の中でよくまれてきた古典舞踊のことであり、紅、黄、青、紫、緑など原色鮮やかな紅型の衣装をまとった男女が、内面の躍動を全身のわずかな動きで表現する。静かな、厳かな踊りだ。沖縄の人たちは、この伝統的な踊りを宮々と継承してきたが、最近では、若い人たちの関心を集め、発表会はいつも満員だし、師匠のもとに弟子入りする人が増えているそうだ。

伝統的な琉球料理に対する関心が高まっていることにも注目したい。復帰前は、那覇の街を歩くと、いかにもアメリカを感じさせる「ステーキ・ハウス」や「ピザ・ハウス」とともに琉球料理の店がたぐさんあった。そこで、安く琉球料理を味わうことが出来た。それが、復帰とともに数が減り、代わって日本食の店が著しく増えた。おかげで、琉球料理は比較的高くつく高級料理となってしまった。これは、本土からの観光客が増えたからということもあるが、また、沖縄の人々の食生活も急速に本土化して行ったからだろう。

が、沖縄の人の話だと、最近、琉球料理の講習会があちこちで催されるようになり、しかも、とても大繁盛だという。地域史の研究も盛んだ。自分の住んでいる字、すなわち自分たちの集落の歴史を掘り起こし、まとめようというわけである。すでに何冊かの字誌が誕生している。それも、学者による作業でなく、住民自身の手になる記録である。まさに自分たちの歴史と文化を見直す作業と言っている。（ジャーナリスト）

ふたたび古座川へ

川井 龍 介

この原稿を書く一週間ほど前に、私は夏休みを家族と過ごすため紀伊半島のほぼ先端に位置する和歌山県の古座川という川でキャンプをすることに決めた。本州最南端の潮岬からわずかに東、変化に富んだ海岸線の景観もさることながら、そこに注ぐ川筋には、まだ川本来の姿が失われていない。

川の様子がある雑誌で詳しく掲載されたのが、古座川へのキャンプ旅行のきっかけだった。が、実は八年前に第五福竜丸事件のことで、この川の河口周辺を取材で回ったことがあったというのも不思議な縁だった。当時私が勤務していた毎日新聞静岡支局では年間企画として事件後三十年を検証することになった。これを担当したのが、現在毎日新聞科学部の斗ヶ沢秀俊記者と私だった。

私たちは、まず、事件当時第五福竜丸の乗組員だった二十三人の乗組員の方々や家族に会い、事件後

三十年の軌跡を追った。また、事件に関わった科学者など関係者から証言を集めた。そして、さらにもう一度第五福竜丸自身の歴史を振り返ってみた。その取材の最後に私は古座川の河口左岸にある小さな造船所を訪ねた。一九四六年、第五福竜丸の前身である第七事代丸の建造が始まったのが古座川河口だったからだ。

ところで、ここから海岸線に沿って北に約四十キロ行ったところに三重県の紀宝町井田というところがある。この辺から熊野市にかけて七里御浜という長い砂浜が続いているが、この、井田の海岸線近くの松が第七事代丸（第五福竜丸）を造るときに資材に使われた。これだけなら別に何ということはないのだが、実はこの第五福竜丸が生まれた所というのが、ある意味で「死に場所」でもあったという不思議な縁があるのだ。私

た元NHKの工藤敏樹さんが一九六九年に作った「廃船」というドキュメンタリーからだ。

ここでもう一度第五福竜丸の歴史を振り返ってみる。太平洋上で被曝し、焼津港に帰って来た船は放射能が強く、危険物と見なされる。海中に沈めるか、焼却して処分することも一時は検討された。放射能がなんであるかという知識は一般には浅く、地元では忌避される。また、いつまでも船があることで水産業界はイメージダウンを恐れた。

結局、政府が二千万円で第五福竜丸を買いあげることになった。五四年の八月になって船は東京へ移送され、東京水産大学の管理の下、学術研究資料として利用される。資料としての価値がなくなる。今度水産大学の練習船に改装。そして、六五年に廃船、六七年に民間業者にただのスクラップとして払い下げられる。それを最終的に手にしたのが深川で曳船の船長をする一人の男だった。

「廃船」の物語はここから始まっている。彼は船のエンジンに目をつけていた。が、まもなく病死、船は彼の債権者である別のスクラ

ップ業者の手に移る。この間に、船は都の埋立地に不法係留されるが、NHKの報道などによりこれがかつての第五福竜丸だとわかり保存運動が起きる。そして、今日あるように船の行く末が方向づけられたわけだ。

が、船のエンジンだけは別の道歩む。スクラップ業者に売られたディーゼルエンジンはさらに転売され老朽化した貨物船に積み込まれる。そして、一九六八年七月この船は熊野灘を航行中に座礁、そこを嵐が襲い船体は壊れ、エンジンは海中に消えて行った。

何の因果か座礁後に船がたどり着いたのが、なんと第五福竜丸の資材を切り出した先のあの海岸沖だったのである。工藤さんの「廃船」はその風景も映している。七里御浜を含め熊野と呼ばれる紀伊半島南部は死者の霊魂がこもるところといわれる。福竜丸の霊魂も熊野という原点に帰ったのだろう。そして、私自身がこの時期に再び熊野を訪れることになったことも、もう一度原点に戻って事件の意味を考えよ、という第五福竜丸の教えの表れかもしれない。

(ジャーナリスト)